かほく市

瀬 戸 町 遺 跡

2008

石 川 県 教 育 委 員 会

(財)石川県埋蔵文化財センター

瀬戸町遺跡

2008

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は瀬戸町遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地はかほく市瀬戸町地内である。

3　調査原因は県営ほ場整備事業瀬戸町地区であり、同事業を所管する石川県農林水産部農業基盤課(旧農業基盤整備課)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

4　調査は（財）石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成17(2005)年度から平成19(2007)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成、報告書刊行事業である。

5　調査に係る費用は、石川県農林水産部農業基盤課と、文化庁の補助を受けた石川県教育委員会が負担した。

6　現地調査は平成17(2005)年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者(当時)は下記のとおりである。

期　間　平成17(2005)年9月14日～同年10月24日

面　積　５２０㎡

担当課　調査部調査第２課

担当者　西野秀和（課長）、松山和彦（調査専門員）、稲垣淳平（嘱託）

7　出土品整理は平成17(2005)年度及び平成18(2006)年度に実施し、企画部整理課の松田智恵子、北寿栄、岩井郁恵、土生久美子、村上泰子が担当した。

8　報告書の作成及び刊行は平成19(2007)年度に実施し、調査部調査第２課が担当した。

執筆・編集は西野秀和（調査部調査第２課課長）が行った。

遺物の写真撮影は大藤雅男の協力を得た。

9　調査には下記の機関・個人の協力を受けた。(五十音順、敬称略)

石川県農林水産部農業基盤課、石川県県央農林総合事務所、かほく市教育委員会

10　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

11　本書についての凡例は下記のとおりである。

(1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。

(2) 水平基準は海抜高であり、T.P.（東京湾平均海面高）による。

(3) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真とで対応する。

(4) 遺構記号は次のとおりとする。

SP（柱穴、小穴）、SD（溝）、SK（土坑）

目　　次

第１章　位置と環境 …… 1
第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 2

第２章　調査の経緯と経過 …… 7
第１節　調査の経緯 …… 7
第２節　発掘の経過 …… 7

第３章　遺構と遺物 …… 9
第１節　調査の概要 …… 9
第２節　遺構 …… 10
第３節　遺物 …… 16

第４章　まとめ …… 23

挿図目次

第 1 図　瀬戸町遺跡の位置図 …… 1
第 2 図　周辺の遺跡 (1/25,000)…… 3
第 3 図　調査区位置図 (1/2,000) …… 8
第 4 図　1 区実測図 (1/100) …… 11
第 5 図　1 ～ 3 区実測図 (1/100) …… 12
第 6 図　3 区実測図 (1/100) …… 13
第 7 図　SD01、SD03、SD04 ～ 06 実測図 (1/60)… 14
第 8 図　SK03、SX02 実測図 (1/100) …… 15
第 9 図　SD01、SK01、SD03 出土土器 (1/3)…… 16
第 10 図　SD04 出土土器 (1/3) …… 18
第 11 図　SD05 ～ 07 出土土器 (1/3)…… 19
第 12 図　SK03、SX02 他出土土器 (1/3) …… 20

表　目　次

第 1 表　周辺の遺跡一覧表…… 3
第 2 表　出土遺物観察表…… 24

図版目次

図版 1　調査前の状況、調査風景、1 区の遺構検出状況
図版 2　1 区の完掘状況、SX01 の完掘状況、用水跡の完掘状況
図版 3　SD01 の土層断面、SK01 の遺物出土状況、SK01 の完掘状況
図版 4　2 区の SD03 の完掘状況、SD03 の土層断面、3 区の SD04 の完掘状況
図版 5　SD08 の検出状況、SK03 周辺の検出状況、3 区東部の検出状況
図版 6　3 区西端の発掘状況、SK03 の土層断面、SK03 の完掘状況
図版 7　3 区西端の完掘状況、SX02 の完掘状況、SX02 の土層断面
図版 8　出土遺物 (1)
図版 9　出土遺物 (2)
図版 10　出土遺物 (3)

第1章　位置と環境

第1節　遺跡の位置

瀬戸町遺跡は、石川県かほく市瀬戸町地内に所在する古墳～中世にかけての集落遺跡で、盛期は古墳時代および奈良・平安時代である。石川県は日本海に向いて弧状に延びる本州の中央部にあたり、海に突出する能登半島と霊峰白山に育まれた加賀平野で特徴付けられている。かほく市はほぼ南北方向に細長い県域となる石川県の中間に位置し、能登半島の基部に相当する。かほく市は平成16(2004)年度に、河北郡高松町・宇ノ気町・七塚町の三町が合併して誕生した新しい市で、東西約9km、南北方向約12.9kmの範囲、面積約64.76平方kmが市域である。その内約53％が農地で、約25％が山林原野である。人口は平成17(2005)年度の国勢調査で34,847人、世帯数は10,536である。ここ数年人口の増減は小さいが、世帯数が増加傾向にあり、高齢化が進行しつつある。市の北側は羽咋郡宝達志水町、西側は日本海、東側は富山県、南側は河北郡津幡町および内灘町で、県都金沢市までは約20～30kmの距離にある。能登有料道路への連絡道や河北縦貫道などにより、時間的に距離は短縮されている。

加賀と能登を分ける大海川は、市の東北方にそびえる能登の最高峰である宝達山(標高約637.35m)を水源として、野寺川と合流して宝達山南西裾を蛇行しながら北東方に流れ、瀬戸町で沖積平野に入り、海岸砂丘の高松砂丘を分けて日本海に注ぐ。かほく市は海岸砂丘の後背低地帯と沖積平地が複合する形で南北方向に伸び、集落立地は内陸側砂丘上と東側丘陵山裾に展開している。市域の地形は東側が山地形で、西側の日本海の砂浜まで変化に富んだ地勢を見せる。県境側が高い山地で、丘陵地、段丘地形、沖積平地、海岸砂丘という具合に、標高を下げながら日本海に面する。標高50～100mの丘陵地は大海川の左岸に展開し南北方向に連なり、北西から西方向に向けて段丘を形成する。大海川の左岸、かつら川の右岸にかけては段丘地形が発達し、小河川による開析が進んで裾部の屈曲が著しいものの独立丘陵を形成するまでには至ってはいない。段丘は標高により低位、中位、高位段丘に区分できるが、50mまでの高さをもつものが大部分で、比較的おだやかな丘陵地形をなしている。低位段丘は西方向に向かって緩い傾斜をもっていて、谷水などを活用する水田などが発達している。宝達山を源として流れる河川は、宝達志水町の宝達川・大坪川・前田川などは扇状地形を形成して西流し、山地形を抜けてくる大海川などが北西方向に向かい、近い間隔で河口を形成するが、市域の南側地域では砂丘裾や段丘裾の小河川は総じて南西方向に向けて流れ、宇ノ気川に合流して市域南の河北潟に至る。市域の南側である旧宇ノ気町は、潟に並行する位置に低平な舌状丘陵や独立丘陵地形が発達し、数多くの遺跡が立地している。

第1図　瀬戸町遺跡の位置図

中位段丘が複雑に入り組んでいる八野、黒川、元女、若緑などの集落域は断層帯で、洪積世に形成された粘土層が砂岩・泥岩層中に含まれた状態で認められている。その粘土層を原

料として古代には須恵器窯が展開し、近代には瓦製造が行われていた。しかし、断層帯上にある丘陵の一部は脆弱であるところから、裾部の削平などによって段丘が崩落する事例があり、須恵器窯の若緑ヤキノ窯跡の緊急調査原因となった事がある。

瀬戸町遺跡は JR 七尾線免田駅から南南東方向約 1.8㎞の距離にあり、大海川中流域右岸に位置する。大海川が丘陵地形を抜けて沖積地形に入った地域で、立地は川に向いた丘陵下の水田に立地している。歴史的年代に限定すれば堆積土の形成は薄いもので、表土下、比較的浅い位置に生活面がある。現在の集落がおおむね南北方向で形成され、遺跡は集落の北側前面に位置する事になる。

元禄 14(1701) 年の村名由来并唱様等書記申帳（岡部文書）、文化 3(1806) 年の鵜川村喜三兵衛元組巨細帳（岡部文書･喜多文書）には「セトノマチ」と記され、能登国羽咋郡に属していた。元治元 (1864) 年の押水組巨細帳（岡部文書）によれば、石村高 273 石 6 斗があり、田高 255 石余・畑高 8 石余・屋敷高 9 石余などが内訳である。稼としては、蚕・柴、抄・苧絹・木綿・莚・漆・楮・縄などが上げられている。慶応 4(1868) 年での百姓家数は 40 余であった。

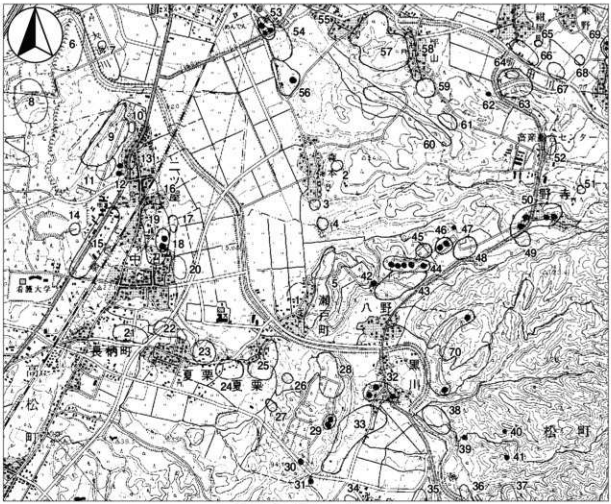
第2節　周 辺 の 遺 跡

本遺跡は県営ほ場整備事業に係る事前調査によって発見されたものである。瀬戸町以北の平地での遺跡展開は皆無に近い状態であったが、本遺跡の発見に時を同じくして行われた宝達志水町森本Ｃ遺跡の発掘調査でも示されていたように、丘陵裾部における遺跡の立地は今後も注意しなければならない地点と思われる。

平地部での遺跡展開の希薄さとは対照的に丘陵、山間地には幾多の遺跡が知られ、発掘調査による成果も多数が上げられている。旧石器時代の遺跡分布は県下に範囲を広げても 30 箇所程度と少ない中、県下で初めて秋田喜一氏によって御館遺跡で剥片が確認されたように旧押水町域 6 箇所での展開が注目されている。本遺跡の北方約 1．7 ㎞の宝達志水町免田一本松遺跡から微細剥離痕を持つ石刃 1 点が出土しているが、明快な遺跡の把握には至らなかった。これに先立って同町末森山山麓の宿東山遺跡からはナイフ形石器 3 点を始めとして少量の剥片の出土を得ているが、同じように限定的な調査に止まり遺跡の内容は不明である。また、同山麓の宿向山遺跡、竹生野遺跡でも剥片石器の出土が確認されている。これらの発見状況から、かほく市や宝達志水町に発達している段丘上には旧石器時代の遺跡が所在している事は確実で、遠からず拠点的な旧石器時代遺跡が発見されるものと期待できる。

縄文時代は第四氷河期が終わり気候温暖化の影響が列島にも及んできた時期であるが、県下では海進現象や海岸砂丘の形成として表れたとされている。かほく市北部では縄文時代の遺跡は石器の単独出土などが多く、時期や性格が把握できる事例は限定的である。旧石器時代と同様に縄文時代においても宝達山麓になだらかな丘陵を伸ばす旧押水町地内での発見が多い情勢に変わりはない。縄文時代草創期と推測される有舌尖頭器や局部磨製石斧が、旧押水町正友はちじかり遺跡、同宿向山遺跡から採集、発掘されているが、遺跡の詳細は不明である。続く早期に所産した押型文土器が、本遺跡の背後の丘陵を越えたかほく市八野遺跡から表採されている。大海川の支流である野寺川の段丘上に立地する遺跡で、残念ながら詳細は不明である。

石川県羽咋市以南の海岸には延々と海岸砂丘が発達している。明治 29(1896) 年発行の『北陸人類学会志』第 1 号に、旧高松町高松と旧七塚町木津の境界や大海川河口近くの二ツ屋Ｂ遺跡（貝殻塚）などでの石鏃の出土が紹介されている。また、縄文土器の出土も知られているが、事実の確認は取れていない。かほく市から南の内灘町にかけては、通称クロガケと呼ばれる黒色砂層の堆積が注目されて



第２図　周辺の遺跡（S＝1/25,000）

番号	遺跡名	主な時代
1	瀬戸町遺跡	古墳・古代
2	森本ドノウバ遺跡	中世
3	森本Ｂ遺跡	古代
4	森本Ａ遺跡	古代
5	瀬戸コノウエ遺跡	古代
6	免田大海川床遺跡	古墳
7	免田丸山遺跡	古代
8	免田中屋敷遺跡	古墳
9	二ッ屋しっとんがらん遺跡	古代
10	細滝神社遺跡	古墳
11	二ッ屋瓦工場遺跡	弥生
12	二ッ屋１号墳	古墳
13	二ッ屋遺跡	古墳
14	中沼Ｃ遺跡	弥生
15	中沼Ａ遺跡	古代
16	二ッ屋Ｄ遺跡	古代
17	中沼Ｄ東遺跡	古代
18	中沼まりやま古墳群	古墳
19	中沼Ｄ遺跡	古代
20	中沼ヤシキダ遺跡	古代
21	長柄マエダ遺跡	古代
22	長柄遺跡	古代
23	夏栗ミヤノ遺跡	古墳
24	夏栗Ａ遺跡	古代
25	夏栗Ｂ遺跡	古代
26	西山敷地谷内遺跡	古代
27	夏栗Ｃ遺跡	古代
28	大海西山遺跡	弥生
29	元女しんめい窯跡	古代
30	元女西山窯跡	古代
31	元女窯跡	古代
32	黒川古墳群	古墳
33	黒川遺跡	古代
34	元女Ｂ遺跡	古代
35	元女堂山中世墳墓群	中世
36	黒川横穴群	古墳
37	黒川又七山経塚群	中世
38	黒川Ａ遺跡	古代
39	黒川ムネヤマ窯跡	古代
40	黒川コエツノノタニ窯跡	古代
41	黒川コダン窯跡	古代
42	八野クグリド窯跡	古代
43	八野Ｂ遺跡	縄文
44	八野ウワノ窯跡群	古代
45	八野ウワノ遺跡	縄文
46	八野ガメ山窯跡群	古代
47	八野アカサカ窯跡	古代
48	八野遺跡	古代
49	野寺Ａ遺跡	縄文
50	野寺窯跡群	古代
51	野寺尼塚	不詳
52	祖原町ひらき遺跡	縄文
53	冬野小塚古墳群	古墳
54	免田一本松遺跡	古墳
55	冬野遺跡	弥生
56	冬野小塚古墳群	古墳
57	坪井山窯跡	中世
58	坪山横穴群	古墳
59	坪山みやの田遺跡	不詳
60	冬野オオクボ窯跡	古代
61	坪山アカサカ窯跡	古代
62	祖原町むかいの窯跡	古代
63	祖原町飯塚古墳	古墳
64	祖原町天神山横穴群	古墳
65	岡部館跡	不詳
66	祖原町ほんでん遺跡	縄文
67	東岡たけのこし遺跡	縄文
68	東岡ほりがいち遺跡	縄文
69	東岡宝殿山古墳群	古墳
70	黒川ホンドノタニ窯跡群	古代

第１表　周辺の遺跡一覧表

きた。大正年間から昭和年代を通して、考古学、地質学による研究が斎藤義基氏、上田三平氏、沼田啓太郎氏、藤則雄氏らによって行われてきた。近年の海岸砂丘地内の所々で行われた試掘調査や旧宇ノ気町白尾地内での発掘調査から、黒色砂層の形成は砂丘地内の窪地あるいは谷地などで限定的に形成されたものと推測されるようになってきた。クロガケでは一部に土器などの遺物を包含する場合もあると考えられる。白尾地内の発掘では黒色砂層は均一に広がるのではなく地点ごとに濃淡があり、遺物の出土もまとまりを持たずに散在する状況であった。白尾地内での調査は表土から浅い位置での検出であったが、厚い海岸砂丘の下に埋もれている場合には、確認および範囲の絞込みはきわめて困難かと想像できる。

丘陵内に立地する遺跡では、本遺跡から東方約 500 m の緩斜面に中期に営まれた八野 B 遺跡が立地している。平成 14(2002) 年にほ場整備事業に係る 530㎡の範囲で調査が実施されて、中期中葉頃の土器を包含した土坑などを発見している。中期前葉では旧押水町と旧高松町の入会地である東開坂手山遺跡が著名である。昭和 35(1960) 年頃、押水放牧場整備中に発見され、緊急調査が地元の研究者であった嵯峨井亮氏、村井一郎氏、松永清氏によって実施され、多数の土器片と炉址を持つ住居跡が検出されている。土器は中期初めの新保式の新しい部分と捉えられて、新保式の細分に問題提起をされている。後年、様式細分の手がかりになる重要な位置を占める事となり、新保様式の新しい段階を示す遺跡のひとつとなっている。他には、中期前半の宝達志水町上田地頭方遺跡、中期後葉の同町紺屋町ほんでん遺跡などが知られている。

後・晩期では宝達志水町紺屋町ダイラクボウ遺跡、同上田うまばち遺跡で発掘が実施されている。前者では丘陵裾部に、弧状をなして複数列の土坑 21 基が配置された特異な遺跡で、底面から堅果類の皮が発見された事から、後期の貯蔵穴群と性格付けられている。後者でも土坑などの遺構が見られ、豊富な土器資料や土偶などが出土して注目された。後期初めの気屋式土器から晩期までの土器が見られる長期に亘る遺跡である。これらの遺跡立地から中期に比較して後期以降には丘陵上から平地へ降りて展開している状況が窺える。

以上のごとく宝達志水町で資料が続々と発見されているが、平成 18(2006) 年、かほく市若緑地内で後・晩期を盛期とする若緑ヒラ野遺跡が発見された。本遺跡からは南へ約 2kmの距離にある山間地で、周囲を低丘陵に囲まれたような疑似盆地状地形の中央部の微高地上に立地する遺跡である。径約 1m、深さ約 0.8m の柱穴を廻らした直径約 5 ～ 6m となる環状柱穴列や大型土坑群などが検出された。柱穴列は木柱が遺存しなかった環状木柱列跡で、径の異なる新旧二つの遺構が確認された。環状木柱列跡は北陸特有の巨木を使う記念物的な遺構であり、その性格を巡る議論が百出している。

弥生時代は大海川左岸の砂丘上に立地するかほく市二ッ屋遺跡出土土器を元に、浜岡賢太郎氏、吉岡康暢氏によって口能登地域の弥生時代研究が始められたと言える。弥生時代は水稲耕作が行われていたとの視点から、水系単位での遺跡のまとまりが推測されている。相見川水系の宝達志水町竹生野トリゲ山遺跡、同竹生野遺跡、同宿東山遺跡などが内列砂丘や段丘上に立地し、前田・大坪川水系では宝達志水町上田出西山遺跡、同冬野遺跡、同免田一本松遺跡などが展開する。大海川水系ではかほく市中沼 C 遺跡、同大海西山遺跡が形成される。中沼 C 遺跡は後期段階の社会情勢が変化している事を反映しているもので、継起的に造営された方形周溝墓群が良好な状態で検出され、砂丘上に立地している点も注目された。また、大海西山遺跡は丘陵頂上部に立地するもので、大規模な堀をめぐらせた高地性集落遺跡と評価され、現在は歴史公園として整備されている。

古墳時代の遺跡は弥生後期での遺跡立地を引き継ぐ傾向が認められる。相見川水系には銅鏡を副葬した前方後円墳を含む宝達志水町宿東山古墳群、同竹生野天皇山古墳群や埴輪が使用されている河原

三ッ子塚古墳群が造営されている。前田・大坪川水系には方墳からなる宝達志水町冬野小塚古墳群が丘陵上と緩斜面上に造られ、同一丘陵内に埴輪を立てる森本大塚古墳が所在している。大海川水系では、かほく市二ッ屋古墳群が知られているが、中沼C遺跡のように砂丘地内に埋もれている可能性も考えられる。後期古墳群の展開での特徴は、前田・大坪川水系で宝達志水町東間宝殿山古墳群や複数の横穴古墳群が中・上流域で造営されている事が上げられ、他地域に対して比較的優勢であったと想定されている。その基盤のひとつとして、7世紀代に須恵器の生産が開始された事が上げられている。

さて、須恵器の生産は奈良・平安時代へ継続し、古代を特色付けるまでの大きな位置を占めるのであるが、宝達志水町とかほく市をまたがる丘陵山間地には、県下三大古窯跡群（鳥屋古窯跡群・南加賀古窯跡群）の一つである高松・押水古窯跡群と呼ばれる40基以上からなる須恵器窯跡が展開している。窯跡の分布は南北約5km、東西方向約3kmの狭い範囲で、前田川・野寺川・大海川・かつら川の上流域に沿う谷筋に、6箇所程度の群で推定されている。

窯跡の発見は大正時代に遡るが、実際に調査が行われたのは昭和30年代に入ってからである。かほく市黒川2号窯跡、同若緑ホウダン1号窯跡、同箕打みやの窯跡などで資料採集を目的とした学術調査が行われ、昭和50年代には工場用地造成や畑地造成などを要因とする緊急調査が、かほく市若緑ヤキノ1・2号窯跡、同八野ガメ山1・2号窯跡、正友ヤチヤマ1号窯跡などで実施され、灰原での須恵器収集だけではなく灰原を含む窯跡全体が対象範囲となっている。

発掘資料だけでなく個別窯跡の表採資料を含め、窯跡群全体を網羅した研究が川畑誠氏から提示されている。それによれば、7世紀前半代に宝達志水町紺屋町ムカイノ窯で本地域での操業が始まり、7世紀中葉から後葉にかけてはかほく市八野ウワノ2号窯跡、同野寺2号窯跡が相次いで煙を上げる。8世紀初めにはかほく市野寺1号窯跡が、続いて紺屋町ムカイノ窯跡の新しい段階の製品、八野ガメ山1号窯跡、さらに続いて八野ガメ山2号窯跡、若緑ホウダン1号窯が操業する。須恵器の画期としてかほく市黒川2号窯があるが、同時期と見られるものに黒川1号窯跡、若緑イナバ山2号窯跡が上げられる。その後では、箕打みやの窯跡、若緑ヤキノ窯跡が位置付けられる。最終段階は10世紀中葉頃に相当し、若緑ムネヤマ窯跡、若緑カツラノ2号窯跡を位置付け、長期にわたり継続して操業が行われていた窯跡群とする。窯は7世紀後半から8世紀前葉と、9世紀前葉から中葉の二つの時期に生産の拡大が認められ、大海川の右岸である八野地区から、川を挟んだ南方の若緑・元女地区へと生産の中心域が移動したと捉えられている。窯跡群で中心域の移動は能美市辰口能美窯跡群でも想定されている事で、供給先の変更や水運の活用、燃料の枯渇によるなどの要因などが考えられている。

古代の遺跡は窯跡だけではない。砂丘地に進出した遺跡として、昭和54(1979)年に調査が行われた宝達志水町北川尻ホシバ山遺跡が上げられる。竪穴27基と掘立柱建物跡の遺構群に和銅開珎や銅製帯金具が出土している。8世紀前半代の限定された時期に止まる律令的村落との性格付けも想定されている。さらに、管状土錘や土製支脚の出土が目立つ宝達志水町上田出西山遺跡も砂丘斜面に立地する古代の遺跡である。古代に所産する丘陵内の遺構は、宝達志水町宿・竹生野地域の弥生末から古墳時代にかけての遺跡に重複する形で展開し、カマドを持つ小型の竪穴や掘立柱建物などが検出されている。竪穴は長さが3～4m程度の方形プランで、竪穴から掘立柱建物への移行との視点で想定されている。丘陵尾根筋の宿向山遺跡で検出された遺構は、長さと幅が約10mばかりの一部を溝で区画したものである。区画内には柱穴状のピットが検出され、明確に建物跡を確定することはできていない。隣接する東側斜面には廃棄したと推測できる土器溜りが見られる。土器溜りには須恵器多口壺、鉄鉢、瓶、坏などや灰釉陶器の碗、皿、手付き瓶などが見られ、土師器の高台坏、皿、鉢、高坏が組み合う。併せて、灯芯油痕やタール状付着物の残る土師器の坏が多い事などから、平安時代中期の宗

教的施設の設置が想定されている。

本遺跡周辺の遺跡は丘陵内に立地する竪穴群や須恵器窯跡、古墳などを主に発掘調査されてきたが、今後は本遺跡のように平坦地や谷地の宝達志水町森本Ｃ遺跡、また、沖積地の宝達志水町南吉田葛山遺跡などのような遺跡での調査が進展する事によって、宝達山麓での歴史研究の深化が計られるものと思われる。

参考文献

浜岡賢太郎・吉岡康暢　1962 「加賀・能登の古式土師器」『古代学研究』第 32 号　古代学協会

村井一郎・蟹蛾井亮・松永　清　1965 「石川県高松町押水町入会・東間坂手山縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌』第 9 号　石川考古学研究会

橋本澄夫　　1966 「石川県押水町森本大塚古墳の子備的調査」『石川考古学研究会々誌』第 10 号　石川考古学研究会

村井一郎　　1966 「羽咋郡押水町北川尻オサノ山遺跡」『石川考古学研究会々誌』第 10 号　石川考古学研究会

平田天秋・村井一郎　1976 『高松町箕打・みやの古墳』 石川県教育委員会

谷　幸信・西野秀和　1976 「羽咋郡押水町竹生野トリゲ山遺跡」『石川考古学研究会々誌』第 19 号　石川考古学研究会

三浦純夫　　1980 『上田出西山遺跡発掘調査報告書』 押水町教育委員会

浅香年木ほか編　1981 『角川日本地名大辞典 17　石川県』 角川書店

高堀勝喜　　1982 「内灘砂丘遺跡研究の歩み」『内灘町史』 石川県河北郡内灘町

高堀勝喜ほか　1983 『上田うまばち遺跡』 押水町教育委員会

滋井　真・本田秀生・西野秀和　1985 『高松町若緑ヤキノ窯跡』 高松町教育委員会

折戸靖幸　　1987 『高松町中沼Ｃ遺跡』 高松町教育委員会

北野博司ほか　1987 『宿東山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

川畑　誠　　1987 「高松・押水窯跡群について」『宿東山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

米沢義光・藤田邦雄ほか　1987 『宿向山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

三浦純夫・越坂一也　1988 『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

折戸靖幸　　1988 『高松町西山遺跡』 高松町教育委員会

垣内光次郎　1994 『紺屋町ダイラクボウ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

平凡社　　1991 『石川県の地名』日本歴史地名大系 17

津田耕吉　　1991 「石川県河北郡高松町野寺Ａ遺跡採集の縄文式土器について」『石川考古学研究会々誌』第 34 号　石川考古学研究会

村井伸行　　1992 『南吉田葛山遺跡Ⅱ』 押水町教育委員会

本田秀生・松山和彦ほか　1992 『押水町冬野遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター

川畑　誠・安　英樹　1994 『正友ヤチヤマ窯跡』 石川県立埋蔵文化財センター

岡野秀紀　　1998 『御館遺跡』 押水町教育委員会

松山和彦ほか　2000 『押水町紺屋町七十苅遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター

本田秀生・白田義彦　2005 『かほく市八野遺跡・黒川Ｂ遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター

本田秀生　　2005 『宝達志水町冬野遺跡・免田一本松遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター

松山和彦・森　由佳・谷内明央　2007 『宝達志水町正友じんとくじま遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター

白田義彦　　2007 「若緑ヒラ野遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第 18 号　（財）石川県埋蔵文化財センター

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調 査 の 経 緯

本書で報告する瀬戸町遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業（瀬戸町地区）に係るものである。

県農林水産部農業基盤課が行うほ場整備事業は、農地の生産性を向上させる為に農地・用排水路・農道などの基盤整備を総合的に実施するものであるが、工事実施にあたっては遺跡の取り扱いについて県教育委員会文化財課との間で事前の調整が図られている。平成 16 年秋に農業基盤整備課から試掘調査の依頼を受けた県教育委員会文化財課が、平成 17 年２月３日に事業対象地域において試掘調査を実施している。事業範囲は概ね東側の山裾から西方の大海川までの間で、東西約 300 m、南北約 200 mの方形に近い範囲である。周知の遺跡は知られてはいなかったが、試掘調査により山裾の現在の集落側に寄って新たな遺跡の拡がりが確認された。古代を主体とする遺跡で、瀬戸町遺跡と仮称された。今回の事業地の北側水田は既に事業が実施されているが、平成 15 年 11 月 18 日に、試掘調査が文化財課によって行われている。瀬戸町遺跡の取り扱いについては試掘調査の結果を基に両者で協議がもたれ、排水路、パイプライン敷設工事で遺跡に影響が及ぶ部分について発掘調査を実施することとなった。

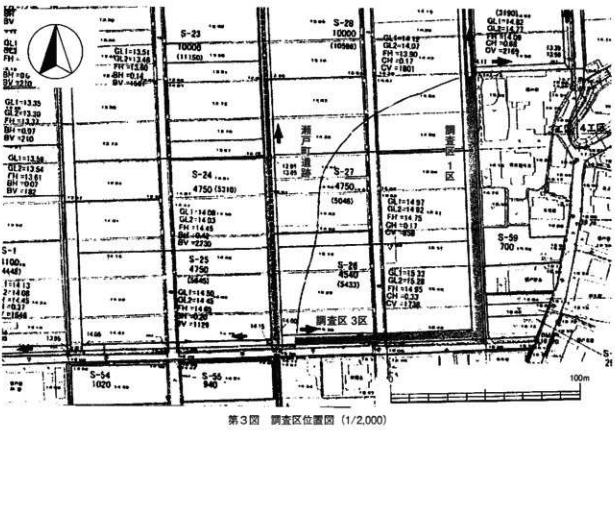
発掘調査は県教育委員会から委託を受けた財団法人石川県埋蔵文化財センターが、平成 17 年９月 14 日から同年 10 月 24 日にかけて調査を実施した。調査面積は 520㎡である。

第２節　調 査 の 経 過

９月初旬の稲刈りが終了した段階で、県央農林総合事務所、文化財課および本センター調査第２課で現地協議をもった。工事範囲の確認と調査地区の確認および排土処理、仮設建物の位置などについて協議し、発掘調査に係る事前準備が整った。９月 13 日から仮設建物用の鉄板搬入を行い、翌日には敷設を実施した。併せて 14 日からは重機による表土除去作業を開始した。調査地点は丘陵裾部から平地にかかる境界域であることから、耕作土を取り除いた下の土は包含層、流土層の堆積は厚くはなく地山面での出入りも少ないことなどから、表土除去作業は順調に進展した。発掘調査に当たる作業員は、瀬戸町を中心として周辺集落に参加をお願いした。地元の瀬戸町を始めとして、過年度に発掘調査を実施して作業の経験のある人がいるかほく市八野、中沼などから参加があった。26 日には発掘器材などを搬入した。翌日から周辺の整備作業を行い、表土除去が終了した東部地区から遺構の検出作業を開始した。初日の参加者は 12 名であったが、調査が進むにつれて増加し参加人数は 20 名近くとなった。東部地区の北側地区は遺構も遺物の出土もまばらであるところから作業は順調に進展したが、遺構面が乾燥している為に遺構の確認に手間取るところがあった。集落に近づく南地区では土坑・溝などが見られるようになった。掘削作業が進捗したことから、10 月５日に予定の南地区東西方向調査区の表土除去を実施した。10 月６日からは南部地区の遺構検出作業と東部地区の遺構掘り下げ調査を並行させて行った。10 月７日には東部地区を完掘する事ができ、全体写真及び遺構写真を撮影した。12 日からは東部地区の実測作業を開始した。14 日までに南部地区の遺構の掘り下げ作業が終了し、全景及び個別遺構を含めて写真撮影を行った。18 日までに南部地区の実測作業が終わり、翌日から撤収作業に取り掛かり、10 月 24 日の鉄板の撤去をもって現地作業は終了した。出土遺物は土師器、須

恵器、珠洲焼などで、遺物整理箱９ケースの出土量であった。同年度内に遺物の水洗作業を、本センター企画部整理課のもとで実施した。

遺物整理作業は平成18年に、本センター企画部整理課において実施した。6月14日から7月12日までの、約一ヶ月の期間である。



第３図　調査区位置図（1/2,000）

第3章　遺構と遺物

第1節　調査の概要

調査区は水路敷設箇所に設定したもので、一部に桝の設置が予定されている地点では調査範囲が拡がっている。調査区の形状は東側の丘陵に沿う地区の延長が長いＬ字状をなしているが、屈曲する位置が直とはならずに角度を付けて伸びる形となっている。東側は幅2.5m、延長130m の範囲で１区とした。屈曲する部分は幅２ｍ、延長約 10m で２区とし、以下、西方の大海川に向かう地区は３区とした。幅 1.5m、延長 90m で、桝が入る地点では調査区幅を拡張している。調査区全体での発掘面積は520㎡である。

現況の水田面で見ると、南東隅が最も標高が高く 15.45m で、北側および西側に向けて高度を下げていく地勢である。調査区北端で 14.56m、西端で 14.75m であるから、約 100 m で 1m 程の差となり、以前の耕地整理により整えられたものかと思われる。

山裾に並行する１区は北に向かうほどに遺構の密度は薄くなるが、端部近くで耕地整理以前の用水跡に想定されるものが見られた。幅約 10m の河道状の落ち込みがあり、その落ち込みの北端に寄せて幅 1m の溝が掘り込まれている。北端から南に約 90m のあたりに幅約 3m の溝状の落ち込みがあり、底面及び周辺部に不規則な配置でピットが見られた。山裾から流れ出ていた溝と想定され、小ピット群は木根の痕跡かと推定される。南端の屈曲部までには、幅約 2m の SD01、幅約 1m の SD02 が調査区を斜めに横切る。いずれも覆土に古代の遺物を含んでいた。溝近くのピットからは古墳時代の土師器が出土している。調査区の屈曲部となる２区は、古代末の遺物を含むSD03が検出された。幅約 120㎝、深さ約 35㎝で、段を形成している。

東西方向の調査区３区の東端部は、溝状遺構が連続する状況で検出された。SD04 は 8・9 世紀代の遺物を包含し、SD05・06 は古墳時代の土師器を、SD07 は幅約 5m、深さ約 50cmの規模で北方に流れていたと推測できるもので、珠洲焼片を包含していた。３区の東端から 20m ～ 50m の範囲は、土坑やピットなどが集中した状況で検出され、１区の南東側の溝状落ち込みが連なる地点とは遺構の配置が変化していると見られた。３区の西端地区では遺構密度が急激に薄くなり、地山とした暗黄褐色砂質土が落差をつけて下がり、遺跡の端部であることが確認できた。

以上の調査状況から、３区の東部を中核とし２区および１区の南端に設定された落ち込みを一つの区切りとするような遺構配置かと推測される。古墳時代と古代および中世が複合する状況から、継続する類似した遺構群が展開している状況と想定される。

土層を見ると、調査前の２区は耕土 16cm・旧耕土 14cm・旧床土 8cm があり、地山として濁黄色粘質土となる。周辺の試掘で旧床土が見られたり見られなかったりするが、淡黄橙色粘質土に切り込むピットが確認されたり、旧耕土中に土器が包含されたりする場合がある。遺物は南東側の高い地域から移されてきた事が想定される。２区の中央では、耕土 15cm・旧耕土 19cm・淡灰褐色砂質土 10cm の下に地山の濁黄橙色粘質土が見られる。砂質土に９世紀代の須恵器・土師器の包含が認められている。遺跡の中核部に近いと想定される２区の周囲では包含層が形成されていると見られる。遺跡の最北端においては類似する土層堆積であるが、包含層の形成が見られなくなる。遺跡の北西端は３区の西端に類似した地山となり深い位置に包含層が見られる。耕土 16cm・床土 16cm・濁黄灰色粘質土 24cm・明黄灰色粘質土 8cm・地山の濁黄橙色粘質土が見られ、地山を切り込む土師器を包含す

る淡灰褐色粘質土がある。地山面が北に向けて低くなっていくことが確認できる。

第2節　遺　　構

1区　SX01　調査区北端で検出したもので、全体形は不明である。現況での長さは600cm、幅160cm、深さ24cmの規模である。床面は段を形成するもので、覆土は単層の暗灰褐色粗砂であった。

用水跡　調査区の北端から約25mばかり南で検出したもので、前耕地整備の時まで使われていた用水跡と推定された。幅は約7m、深さは約90cmで、検出面での高さは14.8m、溝底で13.9mである。北側テラスの覆土は暗茶褐色礫混粘質土、水路覆土は砂礫層、南テラスの覆土は淡茶褐色砂質土（シルト質）である。

SD01　調査区の南端部で検出した溝で、覆土から古代の土器が出土している。検出面の標高は15mで、幅2.4m、深さ約80cmの規模である。掘り方として両脇に段を形成するが、最も深くなる部分に注目すると、北側が一定程度埋まった後に南側に寄るように浅く掘り直したようにも観察できる。その為に、最も深くなる部分がずれるような位置にある。最下層の粗砂層には遺物の包含が多く見られた。

SK01　調査区南で検出したもので、SD01の南掘り方に隣接している。平面略円形で、径77cm、深さ38cmの規模である。土坑の中央に床面から浮いた位置に、横位置に納置された甕が検出され、口縁の一部を欠いてはいるが復元する事ができた。完形の形で埋められたものと推測できる。器形から古墳時代に位置付けられる。

SD02　南端で出土した溝である。SD01から5.8mの距離があり、流れる方向が逆に近い形となる。幅約90cm、深さ17cmの規模で、覆土は粗砂層である。覆土から得られた遺物は古代(8～9世紀代)に所産したものである。

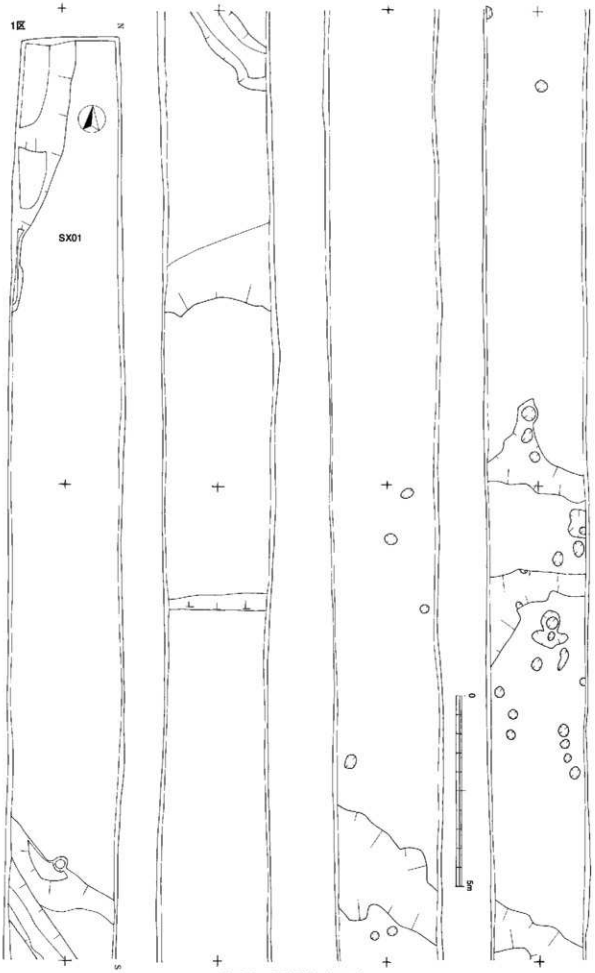
2区　SD03　南北に伸びる溝で、幅130cm、深さ45cmの規模を測る。法面にはテラス面が複雑に形成されているのは、覆土が基本的に粗砂層からなり流水が早かった事に由来するとも考えられる。最下層の粗砂層を除いた各層から遺物が検出され、古代末に位置付けられる。

3区　SD04　2区に接続する位置で検出した溝で、南北方向に走行する。断面形は鉢形のゆるい立ち上がりを示し、底面は丸みをもっている。断面の立ち上がりが西と東では角度が異なるのが見られる。幅1.5m、深さ50cmの規模で、上層部に幅60cmばかりの小振りの溝が重複し、継起的に設定された溝である可能性が高い。覆土は砂層でなり、粒の大小で分層される。出土遺物から古代、8・9世紀代と推測できる。

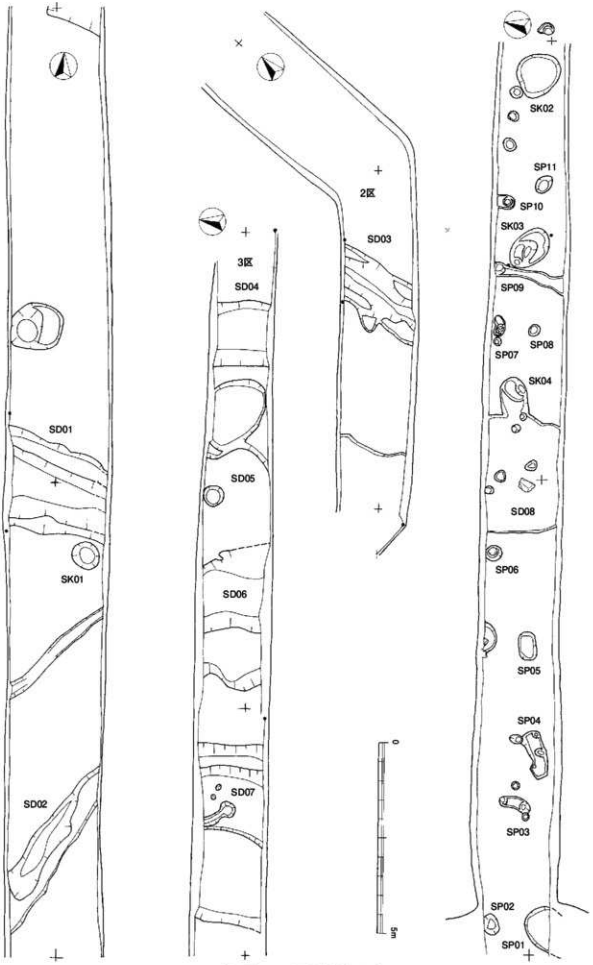
SD05　SD04から120cm西側で検出したもので、激しい流れと推定される粗砂層が複雑に堆積している中でとらえられた。地山とした粗砂層の東側が小溝状の落ち込みを見せているのが注意される。幅は1.5m、深さは20cmほどとなる。特徴的なのは底面の状況で、ほぼ平らに整えられている事である。覆土は粗砂層で小砂利が混じり、古墳時代の土師器が検出された。土層断面から隣接する古代のSD04の落ち込み面よりは先行しているのが認められる。上層は粗砂、粘質の砂がかたまり状に堆積し、早い流れがあったものと推定される。

SD06　調査区東で検出したもので、SD05の西側に隣接する。粗砂層が複雑に交錯している地点で、明瞭な形での溝位置は限定的なとらえ方となった。底面は平らで、古墳時代の遺物を包含した小砂利層が堆積している。

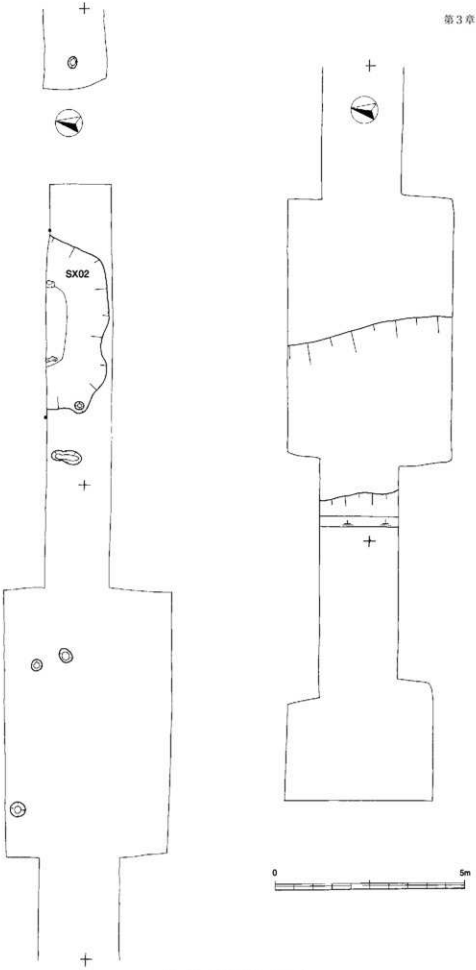
SD07　SD06の西に隣接するもので、小溝や小ピットが底面で検出された。覆土は濃暗青灰色粘質



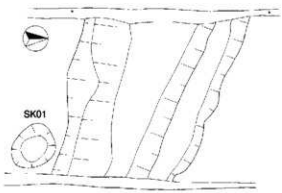
第４図　１区実測図（1/100）

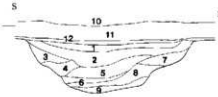


第５図　１～３区実測図（1/100）

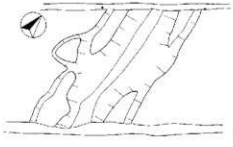


第6図　3区実測図（1/100）

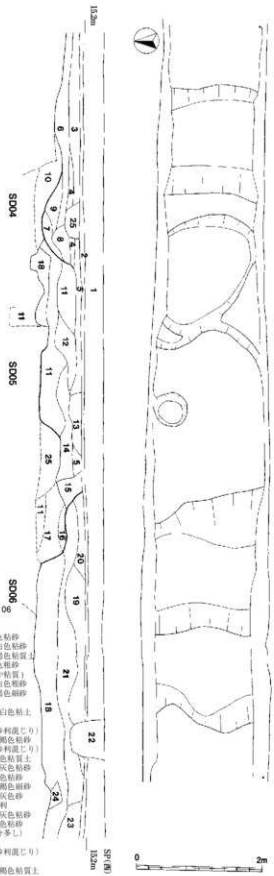




ＳＤ０１　西壁
1　暗茶灰色砂質土
2　淡茶灰色粘砂（地山質の明黄褐色土混じる。炭粒含む）
3　茶灰色粘砂（２層に近い）
4　濃灰褐色粘砂（鉄分の朽色混じる）
5　灰褐色粘砂（４層に近い）
6　暗灰褐色粘質土（均質、砂混じらない）
7　淡黄褐色砂
8　灰白色細砂
9　粗砂（遺物多い）
10　耕土下部
11　床土

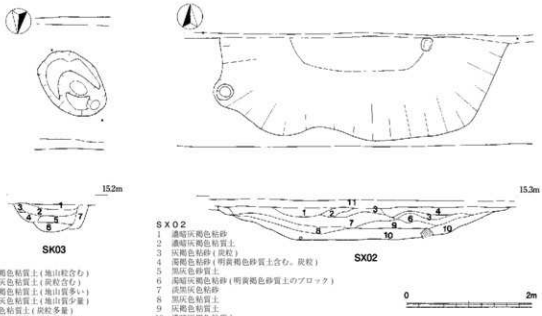


ＳＤ０３　北壁
1　耕土下部
2　床土
3　暗茶灰色粘砂（遺物出土）
4　淡茶褐色細砂（遺物出土）
5　淡青灰色粘砂（遺物出土）
6　粗砂



SD04 05 06
1　耕土
2　床土
3　灰白色粘砂
4　暗灰白色粘砂
5　淡茶褐色粘質土
6　灰白色粗砂（やや粘質）
7　暗黄白色粗砂
8　淡黄褐色細砂
9　粗砂
10　明黄白色粘土
11　粗砂（小砂利混じり）
12　暗黄褐色粗砂（小砂利混じり）
13　灰褐色粘質土
14　淡茶灰色粘砂
15　茶灰色粘砂
16　明黄褐色細砂
17　暗黄灰色砂
18　小砂利
19　明黄灰色粘砂
20　暗褐色粘砂（鉄分多し）
21　粗砂（小砂利混じり）
22　撹乱
23　暗茶褐色粘質土
24　暗灰白色細砂
25　明黄灰色細砂

第７図　ＳＤ０１・ＳＤ０３・ＳＤ４～６実測図（1/60）



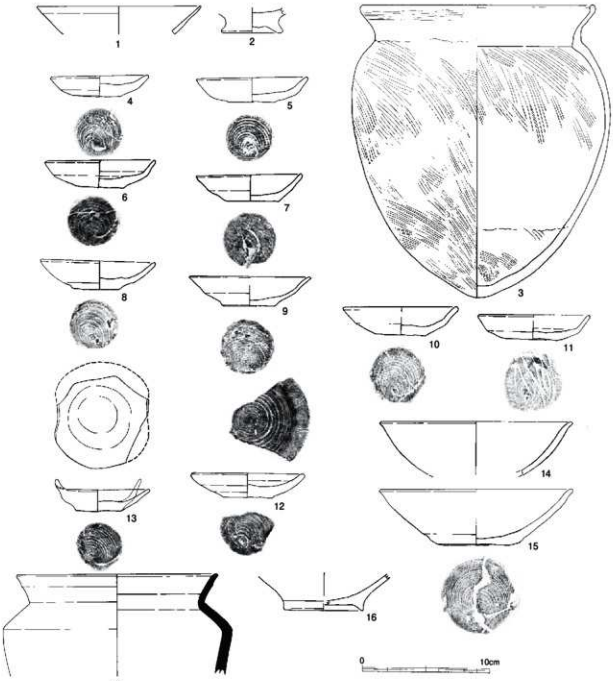
第8図　ＳＫ０３・ＳＸ０２実測図（1/60）

土が見られ、底面には厚さ10cmの粗砂を含んだ小砂利層が堆積している。早い流水が想定できる。覆土から珠洲焼片が出土しており、中世以降に所産した溝と推定できる。

SK02　SD07までは南北方向となる溝遺構が錯綜するような状況で配置されていたが、西方では大きな落ち込みであるSX02などを除くと土坑や小ピットが展開する様相となる。東地区とは遺構の配置状況が変化している事が窺える。本土坑は平面略円形をなし、長径115cm、短径108cm、深さ14cmの規模である。

SK03　SK02から西へ3.5mの距離で検出した土坑で、平面楕円形を呈する。長径120cm、短径80cm、深さ44cmの規模である。床面は中央部が一段窪むような形態となり、壁面に沿う斜めの土層を除いて、概ね水平位置に堆積しているのが特徴的である。覆土には地山質の土や炭化物を多量に包含するものが見られ、掘られた後に余り間隔を空けずに埋め戻された土坑と推測される。SK03からSX02までの間は、小ピットや性格不明の落ち込みが検出された。遺構番号が付されたものには、遺物の包含が認められた遺構である。SD08などは長さ3m、深さ約10cmばかりのもので、古代の小型竪穴の在り方にも類しているようにも見られるが確定はできない。幾つかのピットにおいても柱穴に相当するものが推測できるものの、限られた調査範囲である為に確定するには至らない。

SX02　3区の中ほどで検出された土坑状遺構で、南方の掘り方が確認できた。平面形は概ね方形を呈するもので、掘り込みラインは若干の出入りのある形となる。幅450cm、深さ50cmの規模で、壁面の立ち上がりが極めて緩いのが特徴的である。床面は平担で、礫が床に接する状態で検出されている。覆土は粘性のある砂質土が薄く堆積する在り方に特徴があり、中層に黒色系の土層が見えるのが注意される。



第９図　ＳＤ０１・ＳＫ０１・ＳＤ０３出土土器（1/3）

第３節　遺　　物

出土遺物は整理箱９ケースであるが、図化に耐えない小片が多い状態であった。図化は遺構に伴う遺物を選別して行った。

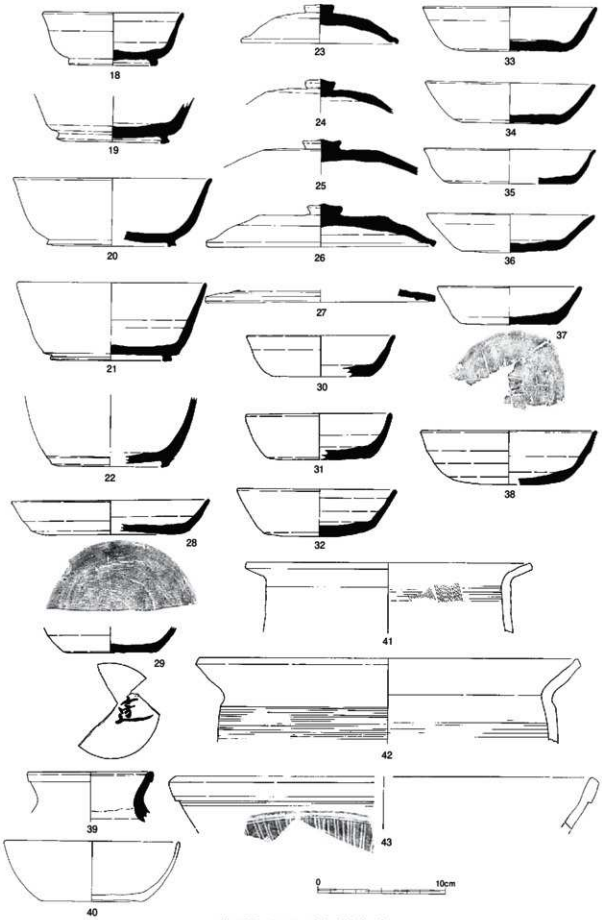
SD01　1、2はSD01の下層から出土した。1は極めて薄手に成形された白磁碗で、器表は削りによると見られる凹凸が残り、一条の沈線が認められる。2は土師器高台埦底部である。外底面は撫でによっ

て整えられ、中央の盛り上がった部分にヘラ先によるものか、簡略なナデが施されている。内底面中央には回転によるものか微かな渦巻き状沈線が残る。胎土は精良である。古代末の所産であろう。

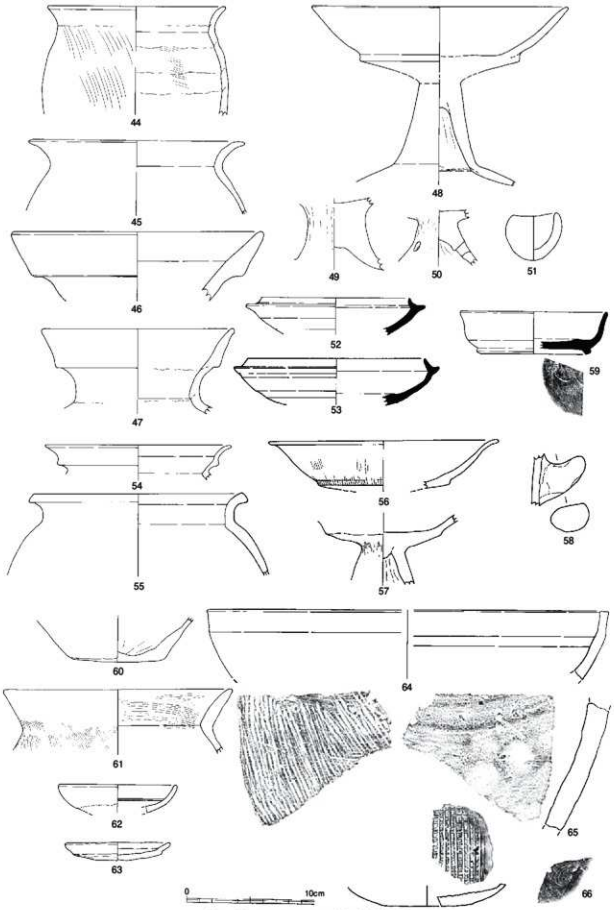
SK01　3は1区のSD01の南に隣接して発見された土坑の中央で検出された土師器甕である。横位置に納められていたもので、口縁部の一部を欠損したが、底部まで接合により復元できた。外傾する口縁の端部が短く立ち上がる形の成形が特徴的で、頸部内面が明確に角の立つのも特色である。底部は尖り気味の丸底で、口縁部の横ナデを除いて体部内外面は斜めの刷毛調整で整えられる。

SD03　4～17は2区で検出された溝の出土品である。4～12は完形で遺存していたものもある土師器皿である。6、7で図示したように体部に稜線が入るような段が成形され、底部はかろうじて見られる程度となるが、回転糸切りが明瞭に残る。11は底面の糸切り痕跡に同一方向の沈線が入るものであるが、発掘時の傷かと推測される。器形は類似しているが、個々で見ると若干の違いが指摘できる。4は底部が厚く、体部は手びねりで成形したように歪みが生じていて、立ち上がりが低くなる。5は外底部は微妙な程の高さしか持たないもので、回転糸切りが明瞭に遺存する。内底面に撫でによる円形の稜線が立ち、全体的に丁寧な作りである。7の内面は丁寧に調整され、全体的に深みのある成形である。完形で出土した。6は内面に口縁部の立ち上がり部に接合が見られる成形で、爪を立てて調整したかのような筋が立ち上がり部に残る。底面は回転させて成形した様子が窺え、比較的平らな面が作りだされている。8の内面の中央に段状に盛り上がった形での成形が遺存し、稜線となって提えられる。10は内面に回転、成形した痕跡が見られて深い体部となり、精美である。内面に墨かと思われる汚れが見られる。12の外周に段はなく、なめらかに立ち上がり、内面に細沈線となるような回転痕が遺存している。13は耳皿で、口縁部全体が他に比較して薄手の成形となるのが特色である。14は口縁端部が外展する形で収められ、内面は滑らかな立ち上がりとなる。外周には化粧土を塗った痕跡が見られる。器表の遺存の良好な部分は淡茶褐色を呈し、回転して出来る撫での稜線が観察できる。15では底部の厚みが殆んど体部と同等とまでになる。口縁端部がやや外に開く形で成形され、口縁部は底部から緩やかな立ち上がりで作られている。16は高台の端部が外縁で踏ん張る成形で、内底面に撫でによる稜線が遺存している。底部の中心部が最も薄く成形されている。付け高台がかろうじて遺存する形であろうか。17は須恵器壺で、外傾する口縁の端部で外展する。角の立つ肩部および体部に沈線が入る。口縁と体部に灰釉が掛かっている。古代末に相当し、11世紀から12世紀にかけてのまとまりと位置付けられる。

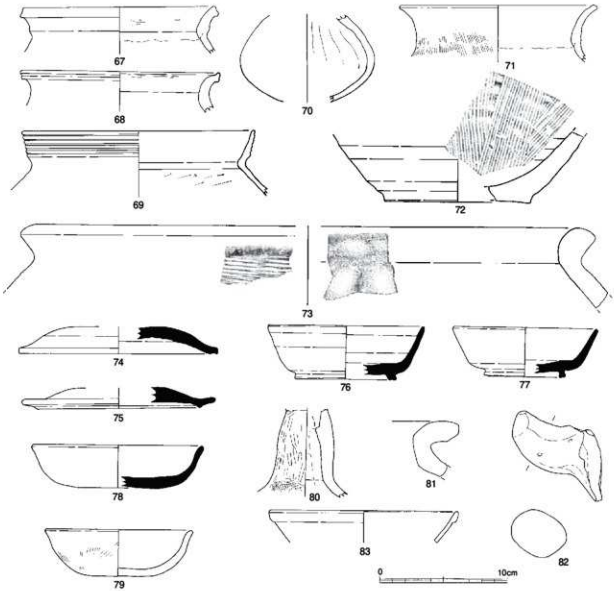
SD04　18～42は3区の起点近くにある溝から出土した遺物である。18は底部と口縁との器厚の差が目立つもので、内面に線条痕が見られる。胎土は良好で、微砂粒が若干量含まれている程度である。高台の断面は整った方形で、直立した形で付けられている。対して19の高台坏は中型品で、底部は厚く成形される。体部の立ち上がりは稜線を入れるほどの角度を付ける。高台は低く、細味に成形される。一番の特色は、胎土に多量の砂粒を混ぜられている事である。20は底部から口縁部までの器厚に差が小さい薄手のつくりで、内面での立ち上がりも滑らかに成形される。高台は低く抑えられている。断面での焼成を見ると淡茶褐色を呈しているのが注意される。21も薄手の製品であるが、体部からの立ち上がりは角度が付いて境が明確となるのが特徴である。内外周共に撫で調整による幅の狭い凹凸が巡っている。22は底部の器厚が薄く、立ち上がり部が厚くなっている。高台は底部端に貼付される。胎土に砂粒の混和が目立つ。23は重ね焼きの痕跡が見られるもので、接合してほぼ完形となる。口縁端の嘴状の伸びは短い。器表面に砂粒の混和による膨らみが見える。24は精良な胎土で、器表面に微砂粒も目立たない。25は平坦な天井部が成形されたもので、灰釉が掛かり、器表面は著しく荒れている。26は口縁と平坦な天井部との境に稜が付くもので、焼成は軟質で灰色を呈している。



第10図　ＳＤＯ４出土土器（1/3）



第11図　ＳＤ０５～０７出土土器（1/3）



第12図　ＳＸ０３・ＳＸ０２他出土土器（1/3）

26は内面に返しの付くものであるが、口縁部のみの出土で全体形は不明である。口縁は体部と同じ厚さで伸びて収めるもので、返しは突帯状に低いものを貼付している。外面はほぼ平らで、凹線状の窪みが付いている。

28は皿形のもので、胎土は微砂粒の少ない精良なものである。底面に櫛歯状の平行線が入っているのが見えるが、性格が判然としない。29は軟質の焼成で、灰色を呈している。底面に墨書が見え「造」あるいは「遊」の右側を欠いたものとも読めるが、風化のために確定はできない。30の口縁端は比較的薄手に成形されている。31は厚手の底部で、直に近い形で体部が立ち上がっている。内外周ともに滑らかな成形となる。33は厚手の底部から体部が立つもので、内面での境は凹線状の窪みが巡る成形となる。手ずれによるものか、内外周ともに滑らかな状態である。34は薄手の作りで、胎土は精良である。焼成では重ね焼きが行われ、口縁端部がリング状に暗青灰色を呈している。36は口縁の外傾度が強く図示しているが、焼き歪みによる変形である。胎土に微砂粒も少なく、精良な胎土である。37

は底面にヘラ先による線刻があり、欠損部があるが「井」の字状のものかと推測される。長さが0.5cmにもなる砂粒を混和させた胎土が使用されている。37は口縁部、底部共に凹凸の残る成形痕が見られるもので、全体的に丸みのある成形と言える。

39は壺器形の口縁で、端部の内外面に段を形成する。胎土に砂粒の混和はなく、微砂粒は均質な状態であり、精良である。

40は土師器の坏で、復元できたが、全体に風化が進行して調整の詳細は不明である。口縁部が内湾気味となるのが、特色である。41・42は土師器長胴甕である。

43は近世の陶器で、鉢器形かと推定される。色調は器表面および断面は濃小豆色を呈し、胎土に白色の微砂粒が多量に混和されている。器表にヘラ先による沈線が縦に施されている。溝出土の主体的なものと時代が異なるが、上層部での混入かと想像される。

SD05　土師器を中心としたもので、44～53までがSD05溝から出土した。図化した土師器の全てが、風化の為に器表の調整痕は観察できない。44は内面に粘土紐積み上げの痕跡が明瞭に残る。胎土は微砂粒が均質に混ざる。48は図上で復元した高坏で、内底面は平坦に成形される。脚と坏部との接合で、脚の内側から粘土紐を差し入れて充填した状況が観察できる。51のミニチュア土器は比較的状態が良いものである。口縁は水平を調整していない。胎土に多量の砂粒が混和されている。須恵器の蓋付坏は2点を図化した。53は底面の削り調整が見られるもので、砂粒の痕跡が明確である。胎土に少量の砂粒の混和が見られるが、内面では目立たない。

SD06　54～59はSD06溝から出土したもので、土師器の遺存状態は良くない。56の高坏には、受部外周に櫛歯による調整が縦に施される。口縁端で外に広げる形の成形がなされ、口縁近くでは横撫で調整がなされている。受部内面は丁寧な磨き調整が施されたようで滑らかな状態で遺存している。59は小振りの高台坏で、底面と口縁の境は凹線が入るような押さえが入る。高台は外側に踏ん張る形で成形され、胎土、焼成ともに良好である。外底面に高台側に寄せて「束」の字が線刻されている。整った字形で、束の中央線が後から引かれていることから、書き順も正確であると観察できる。

SD07　60は平坦とはならない底部で、スレの痕跡も見られない。胎土には砂粒の混和が多い。61は二次的加熱が認められるもので、口縁部が厚く成形され、横方向の刷毛目調整が明確に遺存している。微砂粒を多く含むもの、器表では目立たない。62は12世紀後半から13世紀代の青磁である。内面の底面と口縁との境目に一条の沈線が入り、外周での釉薬の掛かりは底面の途中までである。63は手づくねの土師器皿で、完形品である。口縁が微妙に湾曲するように立ち上がる。口縁の外周は撫でによる筋が顕著に残り、底面は幾つもの面がつながるように成形される。胎土に大きな砂粒が若干含むが、器表では目立たない。焼成は良好である。口縁部の内側約半周に煤の付着が認められる。64は珠洲焼の鉢である。口縁端がやや薄く、角張った成形で治める。表面は淡黒褐色で、内面は濃青灰色となる。胎土に砂粒の混和は見られず、焼成は堅緻である。65も珠洲焼の甕の体部片である。内面で粘土紐の接合部分が観察できる。胎土に砂粒は含まず精良である。本溝の土師器皿以下の遺物は12世紀後半から13世紀にかけてのもので、まとまりを示していると判断される。

SD08　66は古瀬戸のおろし皿の底部片である。底部は回転糸切痕が見えるもので、厚く成形され、口縁が薄くなる。外底部には釉薬は掛かってはいない。15世紀代の製品である。

SK03　土坑で検出されたのが、67～71である。弥生後期末から古墳初頭のまとまりを示している。67の短い口縁部の中に、隆帯のような盛り上がりが見える。69は凹線文土器で、あまり段差のない口縁に凹線が引かれる。口縁の内面に段はなく、内湾気味に立ち上がる。外周に煤が付着する。いずれの個体も類似する胎土で、多くの微砂粒を包含し、遺存状態は良くない。

SX02　3区の西側で検出した土坑から出土したもので、珠洲焼片である。72は全体に卸し目が施されている。外底部に磨れによるのか、滑らかな状態となる。胎土に砂粒は少なく精良で、焼成も堅緻である。73は短い口縁が付く大甕で、72と共に15世紀頃の所産かと思われる。

SP04　74はピットから出土した蓋である。天井部の調整はなく、嘴状口縁の伸びも崩れている。全体に厚みのある成形である。

75～83は包含層から出土した遺物である。75は南西地区包含層から出た蓋で、返し部が貼付する突帯となる。口縁は跳ね上がるように薄く成形して伸びる。76～78も南西地区から出土したもので、76・77は小振りの高台坏である。76には破損面に淡黒褐色の接着剤のようなものが見え、修復されたようだ。底部が厚く角度のある口縁部の形態や、底面と体部との境が明確である。対して、77においては細身の高台となるのが特徴であろうか。内面には自然釉が熔けた状態となっている。78は重ね焼きの痕跡が見える坏で、胎土に砂粒は少なく精良で、焼成も良好である。79は南東地区で出土した土師器埦で、手づくねの埦である。接合復元ができた。口縁端はやや外開きで、やや凹凸が見られる。外底面は境のはっきりした平坦ではない。内面も凹凸が微妙につく成形となる。胎土に微砂粒は少なく良質である。能登地域での特徴を示しているもので、中世の12～13世紀にかけての位置が考えられる。80・82は南東地区の出土品である。共に遺存状態は良くない。81は1区の用水跡から出土した珠洲焼大甕の口縁部である。強く外展している口縁端部のあり方から、13世紀代の所産かと推定する。83は排土から得られたもので、いわゆる玉縁の白磁である。端部内面に細い突線状の盛り上がりが認められる。12～13世紀代に属するものであろう。

第4章　ま　と　め

瀬戸町遺跡は丘陵裾部から広がる水田で発見された遺跡で、低丘陵を抜け平野部に入る大海川を臨む地点に立地する。試掘調査で範囲が確認されたのは水田側だけで、南の集落側および丘陵側については不明となるが、大海川の氾濫原に限られる形で展開しているものと想定される。水田部は北と西に向かって傾斜する地勢にあり、調査においても縁辺部へと離れるに従い遺物量や遺構密度が薄くなる傾向が認められ、調査区西端では地山面が段差をつけるまでに落ち込んでいるのが確認された。

遺跡の所産時期は弥生時代後期、古墳時代後期、古代、中世の４時期で、出土した遺物量から見れば、古墳時代後期から古代にかけての段階が盛期と想定される。

発掘調査は、はからずも遺跡に対して南北・東西方向に調査溝を設定する形となり、遺構の配置状況が推測できる成果が得られている。丘陵に寄った地点では錯綜した堆積断面に、古墳時代後期と古代の溝が複合する配置で検出された。自然営為の河道跡に重なるものと想定でき、遺構の配置において軸となっていたと考えられるが、弥生土器甕を横位置に納めた土坑や建物復元にまでは至らなかったものの柱穴の検出などから遺構の保存状態を大きく損なうものではないように推測される。遺跡の中核地域を考えるならば、調査区１の南端から調査区３の東側に掛かる地域で南北方向に広いものとなろうか。

遺構 SX02 は方形プランの土坑で、中世の所産に推定される。床面からの立ち上がりが緩やかであるのは奇異に感じられるが、古代から連なる小型の方形竪穴の系譜化にあるように思われる。類例の増加が望まれる。

出土遺物では SD03 から得られた土師器皿を中心とするセットの在り方が注意される。底部に小さな回転糸切が残り、体部に稜線が入るような成形が特色である。高台椀の付け高台は外側に踏ん張る形が辛うじて遺存し、皿と共に型式を特徴つけるものである。柱状台が見られないことも時期を限定できると考えられ、11 世紀後半代、12 世紀に掛かるかは微妙な位置であろうか。

本遺跡の周辺は多くの調査が行われ各時代の資料が集積している地域である。これまでの丘陵や段丘での調査だけではなく丘陵裾部や水田地域でも多くの成果が上げられている。本遺跡から北方に指呼の距離にある宝達志水町森本Ｃ遺跡では、多くの墨書土器を含む良好な土器・木器の資料が知られ、西方、大海川をはさんだ中沼Ｃ遺跡でも成果が上げられている。今後は台地上の遺跡との異同を捉えての、地域史を考えねばと思われる。

出土遺物の検討において、藤田邦雄の教示を受けた。文末ながら感謝の意を表したい。

参考文献

安　英樹・柿田祐司　　1995　『富来町貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

番号	実測番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調（内）	色調（外）	調整（内）	調整（外）	焼成	胎土	遺存率	備考
01	D-28	SD01 下層	白磁	碗	12.8		2.2	灰白	灰白					口縁 1/12	
02	D-27	SD01 下層	土師器	高台		4.8	(2)	淺黄	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂、赤色粒少量含む	底部 6/12	
03	C-1	SK01	弥生土器	壺	18.2		22.9	橙	橙	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	良	粗砂多く含む	口縁 6/12 底部／完形	海綿骨片含む
05	D-15	SD03	土師器	土師皿				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り	良	粗砂多量、雲母少量、シャーモット、雲母	完形	
05	D-14	SD03	土師器	土師皿	8.55	3.65	2.05	黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り	良	粗砂多量、礫極少量、雲母	ほぼ完形	
06	D-17	SD03	土師器	皿	8.4	3.8	2.4	にぶい黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り	良	粗砂、赤色粒少量含む	完形	
07	D-16	SD03	土師器	皿	8.1	4.3	2.2	にぶい橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り		粗砂、赤色粒少量含む	完形	
08	D-9	SD03	土師器	土師皿	(8.8)	(3.7)	(2.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂少ない、礫、雲母少し含む	口縁 3/12 底部完形	シャーモット含む
09	D-10	SD03 下層	土師器	土師皿	(9.4)	4.2	(2.35)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂少ない、雲母少し含む	口縁 1/12 底部完形	シャーモット含む
10	D-12	SD03	土師器	土師皿（可能性）	8.7	4	2.4	にぶい黄橙	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂多い、雲母含む	ほぼ完形	
11	D-13	SD03	土師器	土師皿	(8.6)	(4.2)	(2.1)	にぶい黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂少ない、シャーモット少し含む	口縁 6/12 底部完形	雲母含む
12	D-19	SD03	土師器	皿	8.7	3.9	1.95	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り		粗砂、赤色粒少量含む	口縁 3/12 底部 5/12	
13	D-18	SD03	土師器	耳皿	8.2	3.5	2.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り	良	粗砂少量含む	口縁 4/12 底部 12/12	
14	D-22	SD03	土師器	椀	(14.9)		4.15	浅黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂多量、シャーモット、雲母	口縁 4/12	
15	D-20	SD03	土師器	椀	(15)	59	(4.4)	浅黄橙	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂少ない、雲母、シャーモット少し含む	口縁 2/12 以下 底部 12/12	
16	D-11	SD03 下層	土師器	椀 底部		(6.2)	(2.9)	褐灰	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂少ない	底部 5/12	
17	D-21	SD03	須恵器	甕	15.6		8	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	良	礫少量、粗砂多く含む	口縁 1/12 以下	
18	D-2	SD04	須恵器	有台杯	10.8	7	4.15	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、ヘラ切り	良	礫、粗砂少量含む	口縁 1/12 以下 底部 6/12	
19	D-1	SD04	須恵器	有台杯		8.8	(3.6)	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、ヘラ切り		礫、粗砂多く含む	底部 6/12	
20	D-42	SD04	須恵器	有台杯	(15.6)	(10.15)	(5.35)	青灰	青灰	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	良	粗砂多量、礫少量	口縁 1/12 以下 底部 2/12	
21	D-40	SD04	須恵器	有台杯	(14.75)	(9.55)	6.2	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	良	粗砂多量、礫少量	口縁 1/12 以下 底部 3/12	
22	D-55	SD04	須恵器	有台杯		(9.25)	(5.5)	灰白	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂多い、長石、石英少し含む	底部 3/12	
23	D-7	SD04	須恵器	蓋	12.2		3.1	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂多い、長石多く含む、シャーモット少し含む	口縁 10/12	
24	D-52	SD04	須恵器	蓋			(2.7)	灰	紫灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ややあまい	粗砂少ない、長石多く含む	3/12	
25	D-41	SD04	須恵器	蓋			2.75	灰	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	良	粗砂多量、礫少量		須灰、自然釉、墨書物あり
26	D-6	SD04	須恵器	蓋	17.6		3.4	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	甘い	粗砂多量、礫少量	口縁 4/12	
27	D-24	SD04	須恵器	蓋	(17.9)		0.95	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂多量、礫少量	口縁 3/12	
28	D-3	SD04,SD05	須恵器	無台杯	15.4	12.4	2.7	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	良	粗砂多く含む	口縁 2/12 底部 3/12	
29	D-56	SD04	須恵器	無台杯		7.4	(2)	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	良	礫わずかに、粗砂やや多く含む	底部 6/12	墨書あり
30	D-47	SD04	須恵器	無台杯	(11.5)	(7.8)	(3.3)					良	粗砂多い、長石多く含む	口縁 1/12 底部 3/12	
31	D-4	SD04	須恵器	無台杯	11.2	8.2	3.6	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り		礫、粗砂多く含む	口縁 6/12 底部 6/12	
32	D-39	SD04	須恵器	無台杯	(12.4)	7.85	3.7	青灰	青灰	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	良	粗砂多量、礫少量	口縁 1/12 以下 底部 8/12	
33	D-46	SD04	須恵器	無台杯	(13.5)	9.15	3.5	灰白	青灰	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	良	粗砂多量、礫多量	口縁 1/12 以下 底部完形	
34	D-45	SD04	須恵器	無台杯	(13.2)	(7.2)	(3.2)	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂多い、長石少量含む	口縁 1/12 以下 底部 7/12	
35	D-53	SD04	須恵器	無台杯	(13.3)	(10.3)	2.75	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	良	粗砂多量、礫極少量	口縁 1/12 底部 2/12	
36	D-44	SD04	須恵器	無台杯	(13)	(7.5)	(3.2)	青灰	青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂少ない	口縁 5/12 底部 6/12	全体ゆがんでいる
37	D-8	SD04	須恵器	無台杯	(11.1)	(7.4)	(3.1)	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ややあまい	粗砂多い、礫多く長石、石英含む	口縁 2/12 底部 5/12	
38	D-35	SD04	須恵器	無台杯	(13.6)	8.75	4.25	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	良	粗砂多量、礫少量	口縁 3/12 底部 9/12	
39	D-5	SD04	須恵器	甕	97		(3.9)	灰	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂多く含む	口縁 3/12	
40	C-2	SD04	土師器	椀	13.7	8.1	4.7	にぶい橙	にぶい橙	不明	不明	良	粗砂多く含む	口縁 2/12 底部 7/12	
41	D-58	SD04	土師器	甕	(22.35)		(5.5)	にぶい黄橙	にぶい橙	ロクロナデ、カキ目、ハケ目	ロクロナデ	良	粗砂多量、礫極少量	口縁 1/12 以下	
42	D-43	SD04	土師器	甕	(29.8)		(6.7)	浅黄橙	浅黄橙	ロクロナデ、カキ目	ロクロナデ、カキ目	良	粗砂多量、礫極少量、シャーモット	口縁 1/12 以下	
43	D-36	SD04	陶器	鉢	(32.65)		(4.05)	暗赤灰	赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂多量、シャーモット	口縁 1/12 以下	
44	C-6	SD05	土師器	甕	13.7		(8.5)	にぶい黄褐	にぶい褐	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	良	粗砂多く含む	口縁 2/12	

番号	発掘番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	焼成	胎土	遺存率	備考
45	C-8	SD05	土師器	椀	16.2		(6.7)	橙	橙	不明	不明	良	粗砂多く含む	口縁2/12	
46	C-7	SD05	土師器	口縁(壺)	19.4		(5.45)	灰黄褐	にぶい橙	磨耗の為不明	ヨコナデ？	良	礫、粗砂多く含む	口縁4/12	
47	C-5	SD05	土師器	壺	15		(6.7)	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良	礫、粗砂多く含む	ほぼ完形	
48	C-3	SD05	土師器	高杯	20.1		52+(8.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	磨耗	磨耗	良	礫、粗砂多く含む	杯部3/12 脚部はほぼ完形 脚部2/12？脚端部なし	
49	C-14	SD05	土師器	脚付鉢			(5.7)	灰黄褐	橙	ナデ？	不明	良	粗砂多く含む		
50	C-13	SD05	土師器	高杯			(4.5)	にぶい橙	にぶい橙	ナデ、ミガキ？	ミガキ？		粗砂多く含む		
51	C-4	SD05	土師器	小型(手捏ね)	3.35		3.75	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ？	ナデ？	良	礫、粗砂とても多く含む		磨耗著しい
52	D-34	SD05	須恵器	杯	11.6		(2.9)	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	良	粗砂、礫多く含む	口縁1/12	海綿骨針あり
53	D-33	SD05	須恵器	杯	13.9		(3.65)	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	良	礫、粗砂多く含む	口縁3/12	
54	C-19	SD06	土師器	壺	14.4		(2.7)	浅黄橙	浅黄橙	ミガキ	ミガキ	良	粗砂多く含む		海綿骨片含む
55	C-9	SD06	土師器	椀	16.4		(6.5)	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	良	粗砂多く含む	口縁2/12	
56	C-10	SD06	土師器	高杯	17.8		(3.8)	にぶい橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ	良	粗砂多く含む	口縁1/12	
57	C-15	SD06	土師器	高杯			(5.5)	にぶい黄橙	浅黄橙	ミガキ	ミガキ	良	粗砂多く含む		
58	C-20	SD06	土師器	把手				浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ、ハケ	良	粗砂多く含む		
59	D-57	SD06	須恵器	有台杯	11.4	8.2	3.35	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	良	粗砂少量含む	口縁1/12 以下 底部3/12	文字が刻まれている
60	C-16	SD07	土師器	底部		7.5	(3.6)	灰黄	灰黄	不明	不明	良	粗砂多く含む	完形	
61	C-11	SD07	土師器	甕	17.6		(5)	淡橙	淡橙	ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	良	粗砂多く含む	口縁2/12	
62	D-32	SD07	白磁	椀	9.2		2.25							口縁3/12	北宋を器って縁を張っている
63	D-31	SD07	土師器	土師皿	8	6.95	1.45	灰白・にぶい橙	にぶい黄橙	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ナデ、指頭圧痕	良	礫少し含む、全体に細砂	ほぼ完形	海綿骨針含む
64	D-51	SD07	珠洲焼	鉢	30.5		(5.4)	灰	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂少し含む	口縁1/12 以下	海綿骨針あり
65	D-50	SD07	珠洲焼	胴部(壺)			(6.4)	灰	灰	ロクロナデ、あて具痕	ロクロナデ、タタキ	良	粗砂含む	小片	
66	D-30	SD08	瀬戸美濃	おろし皿		7.2	(1.7)	灰白	灰黄		ナデ、糸切り			底部3/12	
67	C-24	SK03	弥生土器	甕	15		(3.7)	灰黄	浅黄橙	ヨコナデ、ナデ、ハケ	ヨコナデ、ナデ	良	粗砂多く含む	口縁4/12	
68	C-23	SK03	弥生土器	甕	15.4		(3.1)	灰褐	にぶい黄橙	ハケ	ヨコナデ	良	粗砂多く含む	口縁3/12	
69	C-22	SK03	弥生土器	甕	18.3		(5.1)	にぶい橙	にぶい黄橙	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	擬凹線、ヨコナデ	良	粗砂多く含む	口縁1/12	
70	C-25	SK03	弥生土器	壺			(6.8)	浅黄橙	明灰褐	ナデ	ミガキ	良	粗砂多く含む		
71	C-21	SK03	弥生土器	甕	15.2		(4.4)	淡黄	灰黄褐	不明	ヨコナデ	良	粗砂多く含む	口縁3/12	
72	D-37	SX02	珠洲焼	すり鉢		11.4	(5.6)	灰	灰	おろし目	ロクロナデ、静止糸切り	良	砂粒細かい	底部2/12	海綿骨針あり
73	D-38	SX02	珠洲焼	甕	(42.6)		(6.25)	灰	灰	ロクロナデ、あて具痕	ロクロナデ、平行タタキ	良（断面中ラミナッチ状）	粗砂少量含む	小片	降灰
74	D-54	SP04	須恵器	蓋	15.4		(2.15)	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	良	礫少し含む、全体に砂粒細かい	口縁1/12	
75	D-48	包含層	須恵器	蓋	12.8		(1.7)	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	良	粗砂多く含む	口縁1/12	
76	D-25	包含層	須恵器	有台杯	12.2	7.9	4.2	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、ヘラ切り	良	粗砂少量含む	口縁1/12 底部2/12	
77	D-29	包含層	須恵器	有台杯	11.2	6.4	3.75	オリーブ灰	オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、ヘラ切り	良	礫、粗砂多く含む	口縁1/12 以下 底部2/12	
78	D-49	包含層	須恵器	無台杯	13.4	8	3.4	灰	灰	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、ヘラ切り	良	礫、粗砂多く含む	口縁1/12 以下 底部4/12	
79	C-17	包含層	土師器	椀	11.4	5.9	3.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ヨコナデ、ハケ目、ナデ	良	粗砂多く含む	9/12	海綿骨針あり
80	C-18	包含層	土師器	脚部			(6.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ハケ、ミガキ	良	礫、粗砂多く含む		海綿骨針あり
81	D-23	用水路	珠洲焼	甕(口縁)	(62)		(4.6)	青灰	青灰	横ナデ	横ナデ	良	粗砂多量、海綿骨針	口縁1/12 以下	
82	C-12	包含層	土師器	取っ手				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	礫、粗砂多く含む		
83	D-26	耕土	白磁	椀	14.6		(2.5)	灰白	灰白					口縁1/12 以下	

図版1

調査前の状況

調査風景

1区の遺構検出状況

図版2

1区の発掘状況

SX01の発掘状況

用水跡の発掘状況

図版3

SD01の土層断面

SK01の遺物出土状況

SK01の完掘状況

図版4

2区のSD03の発掘状況

SD03の土層断面

3区のSD04の発掘状況

図版5

SD08の検出状況

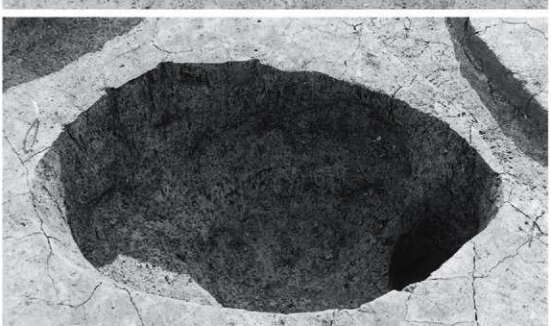
SK03周辺の検出状況

3区東部の検出状況

図版6

3区の発掘風景

SK03の土層断面

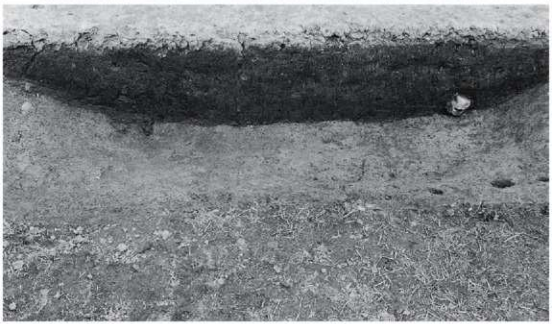


SK03の完掘状況

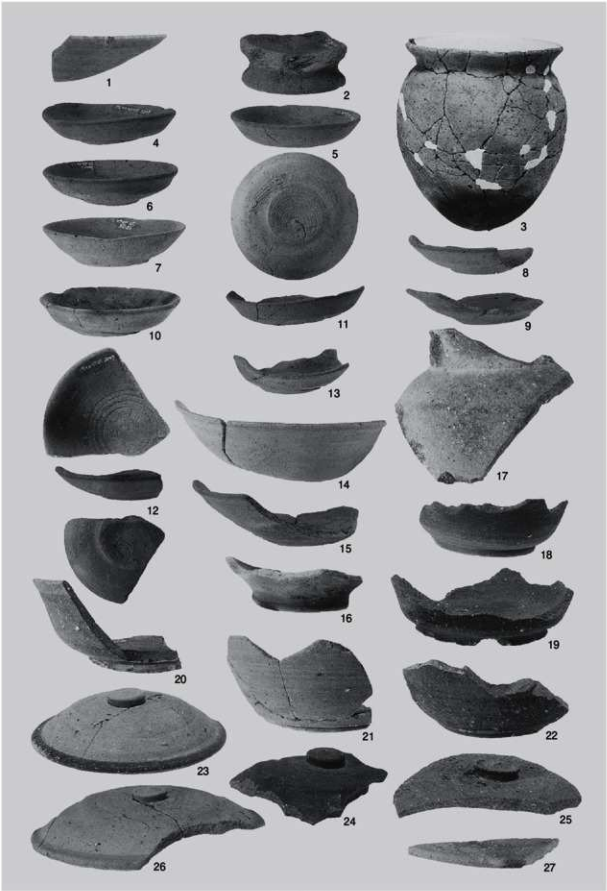
図版7

3区西端の完掘状況

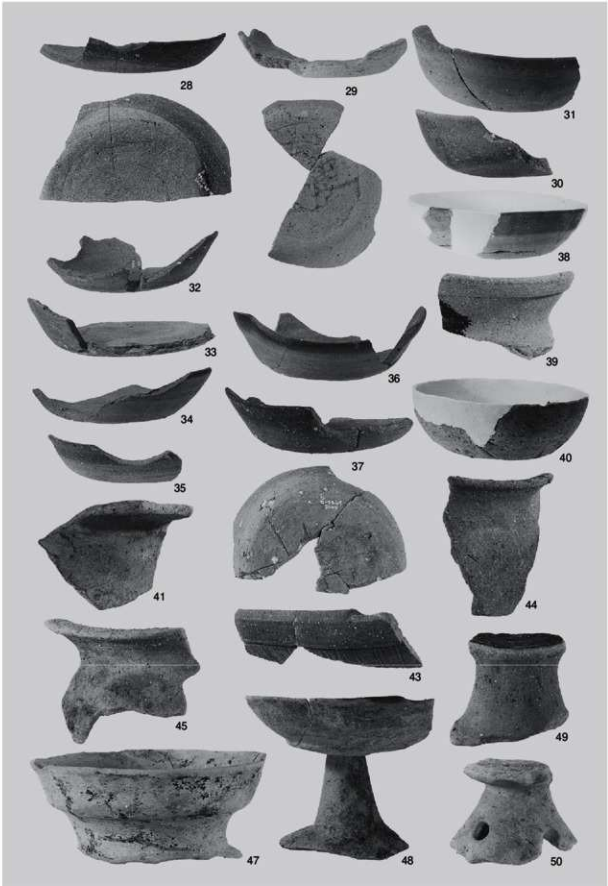
SX02の完掘状況



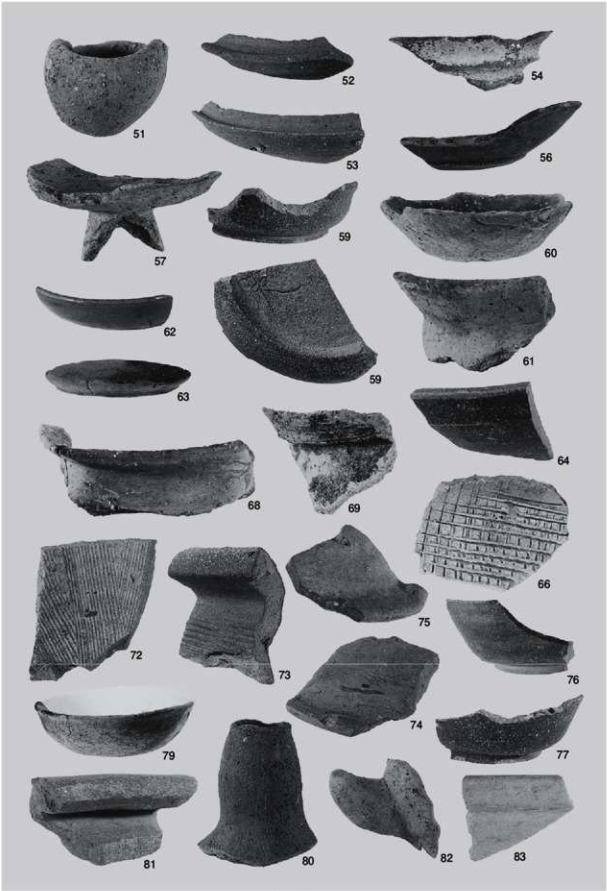
SX02の土層断面



出土遺物（1）



出土遺物（2）


51
52
54
53
56
57
59
60
62
59
61
63
64
68
69
66
72
73
75
76
74
79
77
81
80
82
83

出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	かほくし　せとまちいせき
書名	かほく市　瀬戸町遺跡
副書名	県営ほ場整備事業(瀬戸町地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西野秀和
編集機関	財団法人　石川県埋蔵文化財センター
所在地	〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1　TEL 076-229-4477
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	平成20年3月31日(2008)

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
せとまち 瀬戸町遺跡	石川県 かほく市 せと 瀬戸町	17209	新規	36度 46分 46秒	136度 45分 11秒	20050914 ～ 20051024	520㎡	県営ほ場整備事業（瀬戸町地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀬戸町遺跡	集落跡	弥生時代・古墳時代・古代・中世	溝・土坑	弥生土器・土師器・須恵器・珠洲焼・青磁・白磁	

要約	弥生・古墳・古代・中世の溝・土坑などが検出され、長期に亘る複合遺跡である。中でも古代の遺物量が多く、盛期と見られる。また、溝からの出土ではあるが、11～12世紀代の土師器坏のセットは注意される。

かほく市　瀬戸町遺跡

発行日　平成20（2008）年3月31日

発行者　石川県教育委員会
〒920-8575　石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話　076-225-1843(文化財課)

財団法人　石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
電話　076-229-4477
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　鵜川印刷株式会社
〒923-0053　石川県小松市河田町丁33番地